論　文

遊牧英雄からイスラーム的遊牧英雄へ——

ロシア帝国の中央アジア統治と現地民コラボレーターの権威

秋山　徹

早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

四一年前にフェルガナを征服した際、現在決起しているキルギズ〔＝クルグズ〕たちは、彼らの名誉ある首領の陸軍中佐シャブダン・ジャンタエーフとともに山を越えてフェルガナに渡り、スコベレフが同地の定住民を征服するのを助けました。しかし、我々は、素朴ではあるが未だに原始的な人びとの心を我々に近づけることができなかったのです（トルキスタン総督A. N. クロパトキンのロシア帝国陸軍大臣宛て一九一六年八月一六日付書簡より：傍点筆者）[1]。

序章

ユーラシア大陸の内陸部をほぼ東西につらぬく広大な乾燥地帯——中央ユーラシア[2]。古代より中央ユーラシアは遊牧民が活躍する舞台となってきた。しかし、遊牧民が歴史の主導権を握る時代は次第に過ぎ去ってゆく。とりわけ一八世紀から一九世紀にかけて、中央ユーラシアの遊牧世界は、清とロシアというふたつの巨大な帝国の支配下におかれることとなった。

中央ユーラシアの遊牧民の歴史をめぐるこれまでの研究の比重は、彼らが歴史の原動力として活躍した近世以前に置かれてきたと言ってよい。しかしその反面、それ以降の遊牧民には、概して帝国の辺境に暮らす不穏な存在としてのイメージがつきまとっており、とりわけ帝国側からの抑圧に対する反抗という側面に目が向けられてきた。実際に、ロシア帝国が征服した中央ユーラシアの諸地域においては、遊牧民が参加する大小様々な反乱が起こった。本稿が考察の対象とするロシア帝国領中央アジアにおいては、一九一六年、第一次世界大戦における戦時労働力不足を背景としてロシア政府がにわかに徴用令を発すると、クルグズ（キルギス）やカザフといった遊牧民のみならず、ムスリム定住民をも含む大規模な反乱が勃発する。そしてそれは帝政の崩壊とロシア革命の呼び水となっていった[3]。

ただし、ロシア帝国と遊牧民との関係は必ずしも常に敵対的だったのではない。ロシア帝国と非ロシア人との関係を過度に対立的に捉える旧来の見方が見直されるようになって久しいが、ソ連崩壊後盛んになりつつあるロシア帝国史研究においては、ロシア帝国は従来捉えられていたような「諸民族の牢獄」だったのではなく、むしろ、ロシア正教やロシア語を頂点とし、それらの普及に一定の努力を払いつつも、概してその下に多様な文化や宗教を曖昧なかたちで共存させる多元的な性格を有するものであったことが指摘されている[4]。

もちろん、こうした背景には、ロシア帝国が積極的にそのような政策を採っていたというよりは、むしろ統治能力や同化力の欠如といった消極的な理由がすくなからずあったことも事実である。なかでも中央アジアの統治をめぐっては、こうした点が顕著に認められる。宇山智彦は、同地域へのロシア正教の布教と徴兵制の導入に関する考察において、「ロシア軍人や行政官たちの根底には中央アジア諸民族への猜疑心があり、そのため彼らは無理な統合・ロシア化を進めるよりは、むしろその時点での消極的な安定を保とうとしていた」と指摘する[5]。果たしてロシア帝国は、中央アジアにおいて現地民のロシア化を志向しつつも、それを実質的に進展させることはできなかった。ロシア帝政期を通して、中央アジア諸民族が帝国の法制上、「異族人」（*inorodtsy*[6]）、つまりロシア帝国の「内なる他者」として位置づけられたことは、その端的な証左であった。実際に、新たに参入してきたロシア人

と中央アジア現地民のあいだには、宗教、文化、言語など様々な点で大きな隔たりがあったのである。

そうした「内なる他者」が二〇世紀初頭に至るまで曲がりなりにもロシア帝国に統合されていた背景を考えてみる時、そこに浮かびあがってくるのは、ロシア帝国と現地社会とのあいだに立ちその仲介者となった人々の存在である。このような、帝国支配の「協力者」、すなわちコラボレーターは、一九七二年に発表されたロナルド・ロビンソンの著名な論文「ヨーロッパ帝国主義の非ヨーロッパ的基盤」をはじめとして[7]、欧米のアジア・アフリカ植民地統治研究において以前から着目されてきており、前述のようなロシア帝国史研究の進展につれて、同帝国の異民族統治における同様の存在にも光が当てられるようになった。帝国と中央アジアを仲立ちする存在としては、ヴォルガ・ウラル地方のタタール人がよく知られるが[8]、中央アジア現地民のなかにもコラボレーターが見いだされていった。

さて、こうした現地社会のコラボレーターは、大きくふたつに分類することができる。ひとつは、いわゆる「知識人」（インテリゲンツィア）と呼ばれる近代的な教養層であり、もうひとつは、土着の伝統的な有力者層である。このうち、まず先行したのは前者をめぐる研究である[9]。彼らについてはロシア支配のコラボレーターとしての性格を有していたことが知られており、たとえば、カザフ知識人たちはロシア当局が発行する植民地官報に自発的に記事を投稿するとともに[10]、一九一四年に第一次世界大戦がはじまってからは戦時体制を積極的に支援した。そして、冒頭でも指摘したように、一九一六年六月にロシア帝国が前線後方での労役を命ずる勅令を発すると、彼らは勅令にしたがうよう民衆に呼びかけ、反乱に反対した[11]。

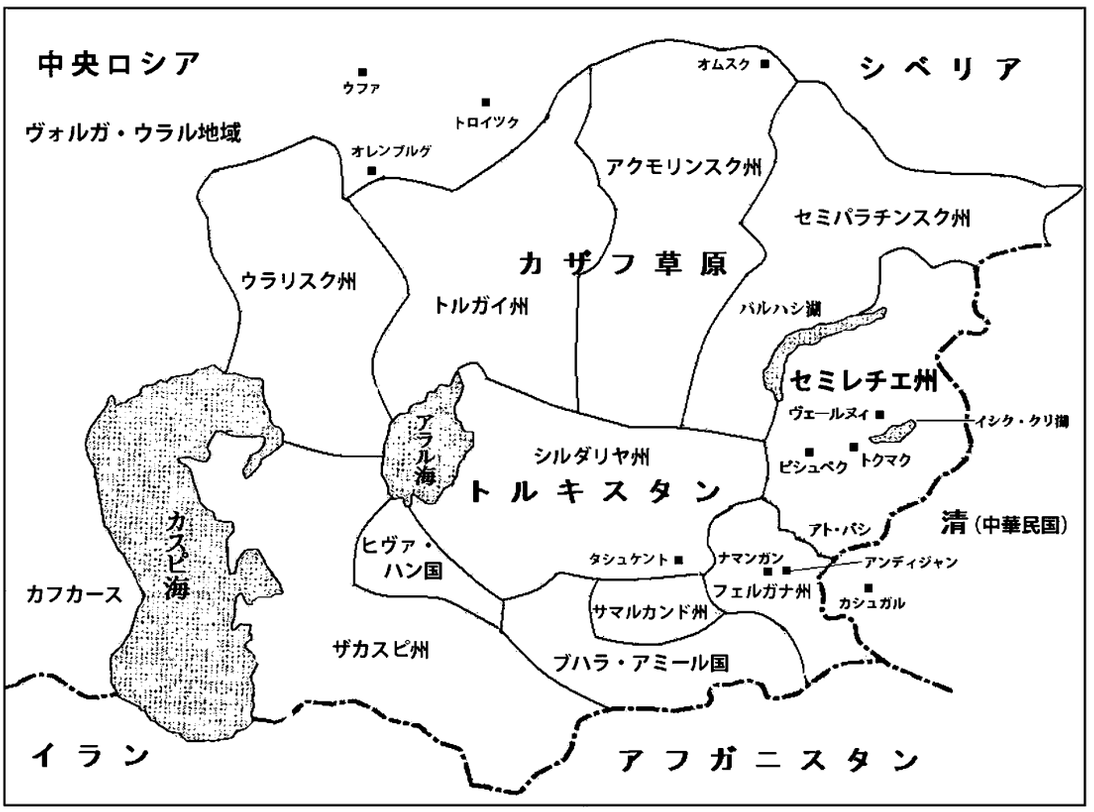
ただし、知識人たちのこうした協力的な姿勢をもって、彼らがロシア帝国に従順ないわば「道具」であったということはできない。宇山も指摘するように、そうした協力の背景にはロシア国家におけるカザフ人の権利向上といった意図が存在していたのであり、彼らの「協力」とは、そうした戦略のもとに行なわれた政治的バーゲニングとして位置づけられるべきであろう[12]。このように、帝国による支配を一方向的に捉えるのではなく、帝国と現地社会との相互作用に目が向けられるようになってきたことは、知識人をめぐる研究の進展に伴うひとつの大きな成果であった。

他方、近年にわかに脚光を浴びるようになったのが、後者の土着の有力者層である。えてして彼らは汚職や腐敗といった負のイメージでとらえられることが多く、同時代の知識人たちからも自民族の後進性の象徴として批判の眼差しを向けられることも稀ではなかった[13]。しかしながら、ロシア帝国による支配は、そうした土着勢力の協力があってはじめてなりたちえたこともまた動かし難い事実である。こうした見地に立つ研究は、中央アジア定住民地域が先行するかたちで進展しており[14]、遊牧民地域の動向についても、たとえばカザフを中心として研究成果が出されつつある[15]。しかし、ロシア帝国支配下の中央アジアの遊牧民に関して見るかぎり、こうした土着勢力を積極的な観点から分析・再評価する研究は、依然として手薄であることに変わりはない。彼らの動向を、ロシア支配との相互作用という側面から実証的に解明する作業は、依然考究すべき課題として残されていると言えよう。

こうした問題意識に立ち、本稿は、天山山脈周辺の山岳・高原地帯に暮らす遊牧民クルグズ[16]の首領層の動向に着目する。一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、知識人が新たな指導者層として確実に成長しつつあったカザフやウズベクなどとは違い、クルグズ社会では知識人層の発達はきわめて遅れていた。二〇世紀初頭に至るまで、クルグズ社会内部で実質的な指導者として大きな存在感を有していたのは、「マナプ」（manap）という称号で呼ばれた部族の首領層であった。筆者はこれまで、彼らの動向とその特質をロシア統治のコラボレーターとしての側面から考察してきたが、本稿の議論の前提として、まず以下にその成果を簡潔に記したい[17]。

ロシア帝国は、一八四〇年代後半から一八七〇年代後半に至るまで、中央アジアにおける軍事侵攻を進展させていった。この時期、ロシアはマナプたちを有用な協力者として位置づけていた。マナプとその親衛隊が発揮する「戦闘性」（*voinstvennost'*）はロシアが軍事作戦を遂行するうえで不可欠であり、それがゆえにロシア帝国は軍事侵攻の過程で軍事協力を媒介として個々のマナプと関係を構築し、彼らが率いる部族集団を軍事ヒエラルヒーに組み込んでいった。

その一方で、ロシアは帝国の臣民としてクルグズ遊牧民を統治してゆく過程では、マナプを統治システムから排除することを試みた。こうした傾向は、一八六七年のトルキスタン総督府の創設によって明確化された。総督府の創設と同時に、クルグズの居住地域は総督府東部に設置されたセミレチエ州南部のイシク・クリ郡とトクマク郡（後にピシュペク郡と改称）に編成された。郡の下には中央アジア現地民の直接統治を目的として「郷制度」（*volost'*）が敷かれ、民衆から選挙で選ばれる郷長が、ロシア統治の新たな仲介



地図：ロシア帝国統治下の中央アジア
（小松久男ほか（編）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、340頁の地図をもとに筆者作成）

者として設定された。これに伴い、マナプはロシア帝国による公の統治システムからは締めだされることになったのである。

しかしながら、こうした施策が実施された後も、マナプはロシア統治のもとで消滅することはなかった。以後半世紀以上に及ぶロシア統治のなかで、マナプは非公式な存在として、むしろ大きな存在感を保ち続けたのである。その背景として指摘できるのが、ロシア統治の脆弱性や不備である。端的に言って、ロシア帝国は半世紀に及ぶ直轄統治においてクルグズ遊牧社会の内部にロシア権力を浸透させ、それを直接的に把握することはできなかった。そしてマナプは、こうしたロシア帝国の統治能力の低さを補完する存在であり続けた。言い換えれば、こうした不完全な統治こそが、二〇世紀に入ってもなおマナプがロシア統治の実質的な仲介者として存続することを可能にした重要な条件だったのである。

もちろん、ロシア帝国はマナプに対して全く干渉せず、彼らの活動を放任していたのではない。中央アジアの征服戦争が終息する一八八〇年代以降になると、クルグズ遊牧社会のなかにより直接的に権力を浸透させ、「民衆」（*narod*）の把握を志向する傾向が顕著に見られるようになる。その過程でマナプは植民地統治の障害と見なされ、「闘争」（*bor'ba*）の対象として位置づけられていった。ただし、たしかに、マナプの流刑に見られるような強硬な措置が実際に実行される場合があったものの、全体として見れば、こうした「対マナプ闘争」はあくまでもポーズの次元にとどまっており、帝国がマナプの影響力を切り崩し、従来の関係を断ち切るまでには至らなかった。

ここで留意すべき点についても指摘しなければならない。すなわちロシア帝国は、マナプを統治の仲介者として積極的に登用したというよりは、むしろ利用せざるをえなかった、言い換えれば消極的に依存していた側面が強いということである。それゆえロシア帝国は、マナプをクルグズ社会の独自の貴族層として社会的に認知していったものの、現地の統治エリートとして積極的に保護・育成することはなかった。一七世紀から一八世紀にかけてロシア正教に改宗しロシア化を遂げたタタール人やコーカサス諸民族のエリート層などとは違い、彼らを正式な貴族身分として帝国の統治システムに取り込むことも一切なかった。このように、ロシア帝国にとってマナプは依存の対象であると同時に、中途半端に統合された存在であったのである。

以上の筆者の考察により、現地の有力者層であるマナプの動向が、支配者であるロシア帝国による位置づけという観点からあきらかになったことは一



図1：シャブダン（左から3人目、1908年撮影）（クルグズ共和国中央国立公文書館蔵）

定の意味を持つ。しかし、それを踏まえたうえで課題として浮かびあがってくるのは、彼ら自身がどのような意図をもって活動していたのかという疑問である。この問題に関しては、筆者もこれまでにシャブダン・ジャンタイ（一八四〇―一九一二）というひとりのマナプに焦点を当て、中央ユーラシアの遊牧世界の伝統的価値観や、イスラームとの関わりのなかからその動向について論じているが[18]、その後の研究の進展と史料状況の変化によって、再考を要するさまざまな課題が生じた。

このような問題関心から、本稿では、ロシア統治下におけるマナプ層の主体的な動向を探るためのひとつの事例として、前述のシャブダン・ジャンタイの動向について再考する。その生没年から容易に想像がつくように、シャブダンはロシア帝国の進出と支配を身をもって体験した人物であった。すなわち彼は、ロシア帝国が中央アジアの征服を進める際に軍事的な協力を行ない、その見返りとして、一八八三年にロシア帝国の陸軍中佐位（*voiskovoi starshina*）が授与された。また、それ以降もロシア統治の特別な仲介者として位置づけられるなど、シャブダンはロシア支配のコラボレーターとしての役割を担っていた。

こうした事情も手伝って、文字史料中にまとまった足跡を残すことが滅多にない遊牧民にしては珍しく、シャブダンに関しては比較的多くの史料が残されている。それらの大部分を占めるのはロシア帝国側によって作成された公文書であり、そこに記されるのはあくまでもロシア権力の目に映ったシャブダンの姿である。従ってこれらの史料は、ロシア支配の道具としてのシャブダン像を構築する危うさをもはらんでいる。しかし、前稿ですでに指摘したことではあるが、シャブダンの動向を精密かつ包括的に検討すれば、それがロシアとの単純な二者関係の枠組みでは到底捉えきることのできない、豊富な含蓄を有していることが明白である。

筆者は前稿において、一九世紀中期から、ロシア帝国による中央アジアの征服が進展した一八七〇年代末までの時期を中心として、このシャブダンの動向を考察し、彼が自らが有する軍事的資質をロシア帝国への「軍事奉仕」として活用しながらも、現地遊牧社会においては、伝統的な遊牧英雄「バートゥル」としての権威を維持していたこと、換言すれば、ロシア帝国とクルグズ双方にとって受容可能な形で軍事指導者としての役割を果たしていたことをあきらかにした。この成果を踏まえたうえで本稿では、前稿では検討が不十分であった時期、すなわち征服戦争が終結する一八八〇年代初頭から、帝政崩壊前夜の一九一六年に至るまでの時期に重点を置き、前稿脱稿後に入手した新たな史料や図像を加味しつつ、その動向について改めて検討してみたい。

本稿の具体的な構成は以下のようになる。まず第一章では、一八八〇年代以降におけるマナプ層の権威の変化について確認する。続く第二章では、同時期におけるシャブダンの動向ならびに権威について、遊牧世界の価値観との関係から検討し、それを踏まえたうえで、第三章で、シャブダンとイスラームとの関係について考察する。最後に本稿のむすびとして、以上の考察であきらかとなるシャブダンの動向を、それ自体で完結したものとして捉えるのではなく、ロシア支配との相互関係のなかに位置づけてみたい。このような作業は、近年研究が進みつつあるロシア帝国と中央アジア遊牧社会との相互作用の解明の一助となるであろう。

史料としては、ロシア帝国の植民地軍政当局[19]の公文書[20]や同時代に発行されていた定期刊行物[21]、ならびに一九二〇年代初頭に実施された民族学調

査の記録[22]を用いる。これらに加えて、シャブダンをめぐってクルグズ自身の手で執筆された以下の叙述史料を用いる。ひとつめは、シャブダンと同じ部族の出身で、マナプの家系に属するオスマンアリー・スゥドゥコフの手による『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』（一九一四年、ウファ）[23]である。同書は、シャブダンの金銭援助によって執筆されたものであり、シャブダンをはじめとするクルグズ首領層の系譜と彼らの事蹟を記したものである。つぎに、シャブダンの息子であるカマル・シャブダノフ（一八八二―一九四八）が著わした伝記『我らが父シャブダン・バートゥルの生涯』（一九四七年、未刊行）[24]を参照する。なお、引用史料中における〔…〕は中略、〔　〕は筆者による補足を意味する。

一章　形骸化するマナプ層の権威

序章で述べたように、ロシア軍政当局はマナプをクルグズ遊牧社会固有の貴族層として認知する一方で、中央アジアの軍事征服が終了する一八八〇年代初頭以降になると、多かれすくなかれマナプを植民地統治の「障害」と見なすようになった。マナプたちに対する、いわば「外部」からの評価がそのようであったとするならば、この当時彼らはクルグズ社会内部においてはどのように位置づけられていたのか、また彼ら自身はどのような動きを示したのか。以下では、まずこの点について確認しておこう。

ロシア統治が進展するなかでのマナプの動向について考える際、その手がかりとしてまず着目したいのは、『シューラー』誌に寄稿された前述の「クルグズについて」と題する記事である。そのなかでとくに注目に値するのは、マナプたちの動向について記された以下の箇所である。

> マナプの地位（manapïlïq）は代々継承されている。マナプは自分が老いはじめると、より賢い子供を自らの代わりとして、民衆を統べる者として残そうとする。マナプは自分が生きているうちに、狼が子供に獣らしさ（zverlik）を教えるように、いかにして民衆から奪うか、派閥〔抗争〕（pārtiyalar）が生じた際に、いかにして自分にしたがわせるか、郷が争った際にいかにして反対者たちを抑えるか――こういったすべてのことについて子供に教える。若きマナプ（yāsh manāp）が民衆からうまく奪ったならば、クルグズたちは「善き父の子はうまく育った」〔といい〕、より穏やかになって、民衆を怖れさせることができなければ「善き父から悪い子が生まれた」という[25]。

まず、冒頭における「マナプの地位（manapïlïq）は代々継承されている」という一文からは、クルグズ社会においてマナプが世襲の称号として定着していたことが窺われる[26]。この点に関して、たとえば、サヤク族のチョイベク・ディカンバイが一八九六年にセミレチエ州軍務知事に宛てて提出した訴願のなかで、

> 私はマナプの家柄に属しています（*prinadlezhu k rodu "manapov."*）[27]。

と記している点は興味深い。この訴願はロシア語で執筆されており、チョイベクの認識を直接的に反映しているかどうか疑問の余地はあるものの、彼がマナプを一代限りではない「家系」として捉えていることが窺える。また一八九七年に『ステップ地方新聞』に掲載された「ビシュペク郡からの便り」において、マナプがチンギス・ハンの後裔を意味する「トレ」（töre）に比定されていることを勘案すれば[28]、彼らはクルグズ社会のなかで、実質的に世襲貴族とみなされるようになっていたと考えられる。

このように、マナプが世襲貴族化しつつあったことはたしかであるとしても、彼らの権威は必ずしも盤石なものではなかったと考えられる。というのも、前稿でも指摘したように、マナプの権威の源は、掠奪や外敵からの保護といった軍事指導者としての役割を果たすことにあったのであり[29]、それが実質的に不可能な時代状況においては、民衆から支持や服従を獲得することは決して容易ではなかったと推察されるからである。このことに関して、「クルグズについて」からの上述の引用では、民衆をしたがわせ、彼らから徴発を行なうことにすくなからぬ執着を抱くマナプたちの姿が描出されるが、それは、マナプにとって民衆をしたがえることが、現実的には決して容易ではなかったことの現れであるともいえよう。

他方、民衆の側にとっても、もはや軍事指導者としての役割を実質上果たしていないマナプたちに対して、従来どおり服従し、その徴発に応じることに疑問や不満を抱いたとしても決して不思議ではあるまい。このことと関連して、一九世紀末以降、マナプによる徴発を訴える訴願がロシア軍政当局に提出されていたことが特筆される。序章でも指摘したように、そうした訴願

が「対マナプ闘争」を展開するロシア軍政当局側からの教唆の産物としての側面があることは否めないものの、マナプに対する民衆側の不満や疑問がその背景に存在していたこともたしかであろう。実際に、この当時、民衆がマナプに対して否定的な印象を抱いていたことは、そのほかの様々な史料からも浮かびあがってくる。たとえば、ピシュペク郡カラケチ郷のクルグズはつぎのように訴えている。

〔マナプたちは〕私たちの家畜を自らの食用に利用します。私たちの上に君臨し、自分では何も行なわず、私たちの負担で生活しています。マナプに服従しないと、彼らは必要に応じて民衆法廷や〔郷の〕行政〔権力〕を利用して、罪をでっちあげ、私たちを罰します。民衆判事たちは先祖の伝統にしたがって、マナプが指示することをそのままを実行しています[30]。

マナプたちに対する民衆の評価に関しては、一九二〇年代にクルグズの古老たちから広範な聞き取りを行なった民族学者M. ガヴリロフが貴重な記録を残している。彼によれば、ロシア統治下においては、マナプはかつてのような遊牧共同体の保護者、つまりバートゥルとしての性質を喪失し、「権力欲、無慈悲、手前勝手、民衆の搾取、派閥抗争や個人的な利益への志向」といった否定的な側面が目立つようになっていったという[31]。この時期、ロシア帝国の直轄統治の進展にともなって、マナプは世襲貴族化の傾向を強めていた。しかし、軍事指導者としての役割を喪失した彼らは民衆からの支持を失い、その権威は形骸化していたのであり、総じて彼らは支配層として不安定な存在であったといえる。

こうした時代状況の変化のなかで、民衆からの徴発に依存する旧来のありかたを改め、その変革に取り組むマナプたちがいたことは注目に値する。その典型的な例が、ソルト族のマナプ、ウズベク・ブシュコイ（?―一九一二）である。

ウズベクは郡都ピシュペク市の郊外を本拠地として家畜売買に携わるとともに、皮革加工場を営んだことが知られており、彼の経営が繁盛していたことは、ロシア軍政当局側の記録からも窺い知ることができる。たとえば、一八九六年にピシュペク郡長が州軍務知事に提出した「ピシュペク郡のマナプ家系キルギズ名簿」によれば、ウズベク一族は駱駝八〇頭、馬一三五〇頭、牛一五三頭、羊六七〇〇頭ならびに現金一五〇〇〇ルーブルを有していたとされる[32]。ウズベクが家畜だけでなく現金を有していたことから、彼が遊牧や掠奪に依拠した伝統的な族長ではなく、いわば実業家としての側面を有していたことが窺える。こうした傾向については、二〇世紀初頭にウズベクの経営を実際に視察した植民地官吏のO. シュカプスキーもつぎのような証言を残している。

過酷な戦の生活を送り、〔…〕僅かなもので満足したかつての「バートゥル」は現在では――仮にこう言い表すことが可能であれば――「ブルジョワ化」しはじめた。マナプは「剣」を用いて「すべてを奪う」ことができた。しかし剣は今や鞘のなかで錆びる運命にある。剣に代わってその座についたのは「金」である。金で「すべてを買う」ことができる。マナプたちはこうしたことを見事に理解したのである。儲け志向がマナプたちの新たな標語となった[33]。

シュカプスキーがいみじくも述べたマナプたちの変化、すなわち、軍事的手段をもちいた「掠奪」から経済的利潤を追求する「事業」に比重を移す傾向は、ウズベク一人に限られたものではなかった。クルグズ社会において、遊牧英雄「バートゥル」として名声を博したシャブダンもまた、実業家への途を模索していたことが知られている。このことに関しては、シャブダン息子のカマルが、

〔シャブダンは〕マナプによる支配は私とともに消えてゆくだろう（manaptik meni menen jok bolot）と語り〔…〕、息子たちに対しては、何らかの職業に就くよう助言した[34]。

と回想しているように、シャブダンは、とりわけ息子たちの生業の確保に熱心に取り組んでいたという。実際に、民族学者のS. M. アブラムゾンが一九二〇年に行なった調査によって、シャブダンの息子たちが様々な「事業」に従事していたこともあきらかにされている。長男のヒサメトディンは一〇〇ヘクタールにものぼる広大な敷地で農業経営を行ない、主に家畜の餌となるウマゴヤシを栽培して市場に出荷した。次男のモクシュは馬匹飼育業を営んでいたほか、三男のカマルは養蜂を行ない、蜂蜜をタシュケントに輸出した。また、四男のアマンは皮革加工業を営んでいたという[35]。

シャブダンが息子たちを事業家として育成しようとしていたことからも窺えるように、ロシア直轄統治下のクルグズ社会においては、もはや軍事指導者としてのマナプは不要の存在となっていた。このように、バートゥル、すなわち軍事指導者としての役割を喪失したマナプたちは、ロシア帝国の直轄統治のもとでその内実を確実に変容させていったのである。

二章　遊牧的権威の維持と強調

前章では一八八〇年代以降のクルグズ社会におけるマナプ層の権威について整理し、軍事的指導者としての存在価値を失った彼らの権威が形骸していたこと、またそれがゆえに実業家への転身を図る傾向が見られたことも確認した。

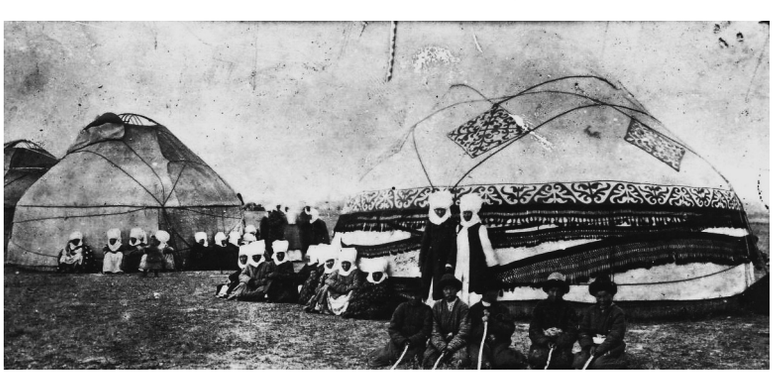
しかしながら、こうした実質上の変容とは裏腹に、マナプたちがロシア帝国の直轄統治のもとでもなお、中央ユーラシアの遊牧社会の伝統的な価値観を重視していたことを指摘しなければならない。とりわけ、コラボレーターとしてロシア帝国に協力していたシャブダンが、現地のクルグズ社会においては、伝統的な遊牧英雄に求められる役割や、民衆たちが持つ遊牧的な価値観に合致すべくふるまっていたことが、当時の様々な史料から浮かびあがってくる。

仲裁者としてのシャブダン

社会人類学者の松原正毅は「遊牧社会における王権」と題する論考のなかで遊牧社会の君長に求められた資質や役割について整理しているが、そのひとつとして公平な裁きの遂行を指摘している[36]。この仲裁者という資質に関しては、以下に示すように、実際にシャブダンはクルグズ社会において民衆から名声を得ていた。これに関連して、シャブダンの没後、『シューラー』誌上に「天山の暗い窪地から」と題する追悼記事を寄稿したサブル・ガブドゥルマーンという人物は、以下に示すような興味深い記述を残している。彼はシャブダンの壮麗な天幕（図2）を「紙もペンもない官房」（kāgāz qalemsiz kānselariasï）と呼び、そこに多くの人々が訪れる様子を活き活きと描きだしている。

> ある者は盗まれた家畜について、ある者は家出した娘について、ある者は家畜のやりとりについて、ある者は殺された人間のクン〔＝賠償金〕について、〔…〕みなそれぞれ自分の用件について話す。この人〔＝シャブダン〕はそれぞれの訴えすべてを耳で聞いて、解決している。つまり、彼は読み書きを知らずとも、法律に相当する犯罪が記された書物のすべての項目が心のうちにある。このようにして彼は検事五人分にひとしい仕事を自分ひとりでこなしている[37]。

序章で指摘したように、一八六七年にロシアによる直轄統治が始まった際、主に行政・治安関係を担当する郷長とともに、慣習法にもとづく裁判を行なう者として「民衆判事」（*narodnyi sud'ya*）が、やはり民衆からの選挙によって選ばれることが定められた。しかし、上述の件からは、直轄統治の開始から約半世紀が経過した二〇世紀初頭にあってもなお、非公式なかたちではあれ、シャブダンが司法機能を備えた首領として実際に活躍していたことがわかる。


図2：シャブダンの天幕（右側）（クルグズ共和国中央国立映像音響写真史料館蔵）

民衆への富の分配：気前良きバートゥル

松原はついで、遊牧民の君長に求められた資質として、掠奪における公平な分配を挙げ、掠奪物に対する私的な貪欲さをあらわにすることは、最も低い評価の対象となったと指摘する[38]。言うまでもなくこうした価値観は、クルグズ遊牧社会においても共有されていた。一九二〇年代のクルグズ社会を実見した、前出のロシア人民族学者ガヴリロフは、

> バイ〔金持ち〕はマナプにはなれない（bai bolsang manap bolmaisïn）[39]。

というクルグズの格言を引き、民衆にとって理想のマナプ＝バートゥルとは、「与えるが、受け取らない」人物である点を指摘している。前章であきらかにしたように、この当時マナプのあいだでは、個人的な蓄財をはじめとして、こうした価値観に逆行するような傾向が顕著となっていた。シャブダンが息子たちを実業家として育成しようとしていたことも、そのような流れに対する迎合のひとつの現れであったと考えられる。

しかしその一方で、シャブダン自身は私的な貪欲さを忌避し、民衆に物惜しみなく与えることを是とする遊牧社会の伝統的な価値観に配慮しようとしていたことが様々な史料から浮かびあがってくる。このことについて息子カマルは、前述の伝記のなかで、「シャブダンは富や家畜を蓄えることはなかった。人々からは贈り物や金、家畜が次々と届けられたが、それらはすべて分け与えられた。蓄財を好まず、物惜しみすることがなく、客をよくもてなした」と回想する[40]。オスマンアリー・スドゥコフもまた、『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』のなかでシャブダンのそうした側面をつぎのように記している。

> 家にいようと、道にいようと、街にいようと、草原にいようと、〔シャブダン・バートゥルの〕周りには常に人々が集まり、道を譲ろうとはしなかった。〔シャブダンは〕日中に数千ソムを受け取っても、すぐに人々に与えてしまうため、晩までには無一文となっていた[41]。

このほか、シャブダンの没後、現地のロシア軍政当局が発行していた『セミレチエ州公報』に掲載された追悼文には、つぎのような逸話が紹介されている。「あるときシャブダンは馬に乗って山へでかけた。すると、ぼろを身にまとったクルグズが歩いていた。シャブダンが事情をたずねると、なけなしの馬すら失い、日雇いで材木の運び出しをしているという。するとシャブダンは、『我が馬を持ってゆけ』と言って馬から降り、歩いて帰った」[42]。

シャブダンのこのような傾向は、ロシア軍政当局の公文書史料からも垣間見ることができる。一八九五年から翌一八九六年にかけて生じた、シャブダンの年金の増額をめぐる案件がそれである。以下、その経緯を追ってみよう。

序章においても指摘したように、ロシア帝国は一八八三年にシャブダンに陸軍中佐位を授与したが、以降彼にはその軍事階級に応じて、年額三〇〇ルーブルの年金が支給されていた。ところが、シャブダンは一八九五年にその増額を求めた。彼は、かつてのコーカンド・ハン国征服軍事作戦における上官で、当時ザカスピ騎馬コサック隊指揮官を務めていた陸軍少佐シュタケリベルグ伯爵に働きかけを行なった。この要請を受けた同少佐は、同年一二月に上官でザカスピ州軍務知事のA.N.クロパトキンに書簡を送り、年金額引き上げへの賛同を求めた。クロパトキンは、中央アジア征服作戦に参加した経験を持つ陸軍軍人であり、シャブダンへの軍事階級授与を熱心に支持した人物でもあった[43]。はたして、クロパトキンもこの要求に賛同し、翌一八九六年一月に少佐の書簡の写しを添えてセミレチエ州軍務知事イワノフに働きかけた[44]。

以上が増額を求めた経緯であるが、それではシャブダンはなぜ年金の増額を要求したのだろうか。シャブダンの要求は恐らくは口頭で行なわれたと考えられ、残念ながら、彼名義の書簡は管見の限り一切残されていない。ただし、以下に記した、前述のシュタケリベルグ伯爵の書簡の件からは、シャブダンが年金の増額を要請するに至った背景がおぼろげながら浮かびあがってくる。

> 傑出した名門の地位ゆえに、シャブダンはキルギズの慣習にしたがって民衆と政府のために莫大な支出を余儀なくされています。そのほかにも、シャブダンは、持たざる者たちにすべてを与えてしまう人物として有名です[45]。

この件からは、シャブダンが「気前の良い人物」としてのイメージに腐心していたことが窺える。したがって、シャブダンが年金の増額を求めた背景には、彼が遊牧社会の君長に求められた「気前の良さ」を演出するために、かつて征服作戦を共にしたロシア帝国の上級将校たちとのコネクションを利用しつつ年金の増額を図り、その資金を賄うための一助にしようとしていた可能性があったと考えられる。もちろんこれはひとつの解釈に過ぎないかもしれないが、同時代の複数の証言が彼のそのような傾向を認めていることを勘案するならば、あながち根拠のない推定とはいえないであろう。

他方において、シュタケリベルグ伯爵やクロパトキンといったロシア軍人たちがシャブダンの要請に協力的であった背景には、現地社会における彼の遊牧君長としての伝統的権威を維持することで、地域社会の帝国への統合を

容易にしようとする意図があったものと考えられる。

ちなみに、気前の良さをアピールする志向は、シャブダンに限ったことではなく、多くのマナプに共通して見られたようである。『シューラー』誌に掲載された「クルグズについて」には、そのことに関するつぎのような記述を見いだすことができる。

> マナプたちはとても気前が良い。来た客は誰であれひとりとして追い出されることはない。羊が屠られて鍋がかけられ、肉が茹でられる。サモワールからは一日中〔火が〕絶やされない。来た者が飲まず食わずして去ることはない。見知らぬ旅人でも、親しい客でも、彼らの帰り際にマナプは馬を一頭贈る[46]。

以上の考察からもあきらかなように、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのシャブダンをはじめとするマナプたちの動向には、従来から指摘されていた負の側面である民衆からの徴発のほかに、気前の良い施しという側面も存在していた。これらのふたつの側面は、一見すると相反するように思われるが、穿った見方をするならば、それらはむしろ不可分の関係にあったと考えることもできる。

そうしたことにいち早く気がついていたのは、一九世紀末にピシュペク郡長としてクルグズの統治に当たったロシア人軍政官A. タルィジンである。序章において指摘したように、この当時ロシア軍政当局において「対マナプ闘争」の方針が顕在化していったが、タルィジンこそ、そうした反マナプ政策を声高に唱えた最初の人物であり、前述の年金増額問題をめぐっても異議を唱えていた。タルィジンは、上官のセミレチエ州軍務知事イワノフに宛てて提出した、年金増額に反対する報告のなかで、シャブダンの「施し」の本質について、以下のような興味深いコメントを残している。

> 民衆の目を欺くためにシャブダンはなけなしの馬を貧民に与えます。それは強く目に焼き付き、彼は名声を得ます。こうした施しは何倍にもなって彼に戻ってくるのです[47]。

このほか、オスマンアリーが、「〔シャブダン・〕バートゥルのもとから貰ってくることは価値あることと見なされた」とする一方で、「〔シャブダン・〕バートゥルに贈ることは最高の名誉であった」と記していることからも[48]、シャブダンによる施しは単に一方向的なものではなく、それに対する民衆側からの見返りという側面も存在していたことが窺える。

軍事指導者としての役割を事実上喪失するなかで、シャブダンは実業家への転身といった現実的な生存戦略を模索した。その一方で彼は、当時のクルグズ社会でなお支配的であった遊牧世界の伝統的な価値観に配慮し、むしろそれを強調することで、彼の存在意義をより確固たるものにし、なおかつその副産物として実利も得ていたと考えることができよう。

勇敢な遊牧英雄バートゥルとして

これまでも繰り返し指摘してきたように、一九世紀後半以降シャブダンをはじめとするマナプは軍事指導者としての役割を実質的に喪失した。しかしながら、そうした時代状況にあってもなお、シャブダンは遊牧的なアイデンティティも保持し続けていた。そのことは、彼が遊牧英雄、すなわちバートゥルとしての尊称を維持し、むしろそれを強調していたことからもあきらかである。

その証左として注目に値するのが、『シャブダンの叙事詩』(Shabdan Jomagi) である。この叙述詩は、一八六〇代初頭にシャブダン率いる親衛隊が行なった掠奪をモチーフとして、彼らの勇敢さを賞賛する武勇伝である[49]。その成立背景については不明瞭な部分が多いものの、シャブダンの依頼を受けたムーサー・チャガタエフというひとりのクルグズが、一九〇九年から翌一九一〇年にかけて作成したことが知られている。坂井弘紀が指摘するように、中央ユーラシアにおいて、叙事詩が王権や支配層の権威を正当化する役割を果たしてきたことを踏まえれば[50]、シャブダンがこの叙事詩の作成を依頼した背景には、自身の勇敢なバートゥルとしての資質をクルグズ社会に対してアピールしようとする意図が存在していたものと考えられる。

シャブダンが生涯にわたってバートゥルという尊称とともに呼ばれていたこと――クルグズ社会にあって「バートゥル」と称された人物は決して多くはなかった――は、彼の没後『セミレチエ州公報』一九一二年四月一〇日号に掲載された訃報記事にも端的に反映されている。この新聞は、ロシア語欄とアラビア文字テュルク語で書かれた「現地語欄」(*tuzemnyi otdel*) を有するバイリンガル紙であったが、そのロシア語版における訃報のタイトルが「陸軍中佐シャブダン・ジャンタエーフの逝去」(*O smerti Voiskovogo Starshiny*

Shabdana Zhantaeva）とされる一方で、後者では、

> ジャンタイの息子シャブダン・バートゥルの逝去（Shabdān bātīr Jāntāy ūghlīning ōpātī）[51]。

と記されていた。この記事のように、シャブダンの名前に「バートゥル」の尊称を付した記述は、前出のサブル・ガブドゥルマーンが『シューラー』誌に寄稿した論説のなかにも認められる[52]。こうしたことから、シャブダンが二〇世紀初頭においてもなお、クルグズ社会では尊敬すべき英雄、バートゥルと目され、そのように呼ばれていたことが窺える。

このバートゥルという尊称をめぐっては、一九世紀末から二〇世紀初頭のクルグズ社会においては、首領がバートゥルであるということ、すなわち彼らが勇敢な英雄としての資質を有しているということに依然として重きが置かれていた点に留意しておく必要があろう。たとえば、一九世紀末にセミレチエ州南部の山岳地帯を管轄するアト・バシ管区の長官は、同地域に暮らすマナプ、チョコ・カイドゥの素性について報告するなかで、「チョコ・カイドゥはキルギズ語の識字能力に優れ、ロシア語も十分上手に操る」とする一方で、「彼は類い稀な記憶力を有しており、博識である。彼は、かつて掠奪を行なっていた己の民族の過去を学ぶとともに、〔…〕己の父祖たちのそうした罪深い生活を英雄視している」と記している[53]。また、二〇世紀初頭に民族誌調査を行なった植民地官吏のA. ソコロフの調査記録によれば、マナプをめぐるクルグズの見解として、それが父から子へと自動的に世襲されるとする見解がある一方で、必ずしも世襲されるわけではなく、バートゥルとしての勇敢な資質が不可欠であるとする見解もあったという[54]。さらに、このことに関連して、前述の『シューラー』誌の「クルグズについて」のなかにも興味深い記述を見いだすことができる。記事では、「現在〔つまり二〇世紀初頭〕でも、マナプたちに話しかける際には『バートゥル』という」[55]こと、さらに、

> マナプたちは自らが家畜を飼育し、種を蒔くことは恥である〔と考えている〕。勇者（yigitlik）とは見なされない。人から〔家畜を〕奪って屠ることが名誉であり、バートゥルらしい（bātirliq）ことであるという[56]。

と指摘されており、ここからも、クルグズたちのあいだでは、掠奪をバートゥルに相応しいものとみなす価値意識が存在していたことが窺える。

以上の考察からもあきらかなように、クルグズ社会においては、二〇世紀初頭という時代に至ってもなお、遊牧的な勇敢さが首領の資質として求められていた。シャブダンが遊牧世界の伝統的な価値観に配慮し、むしろその体現者としての側面を強調した背景にはそのような事情があり、マナプたちが軍事指導者としての役割を事実上喪失するなかにあって、民衆に対する権威を維持しようとしたことの現れであると考えられる。

以上でみたように、シャブダンは遊牧的な資質を強調しつつも、その一方で、それを補完しうる新たな権威の源泉をも模索していたことが特筆される。このことに関して、次章では、シャブダンとマナプの権威について、イスラームとの関係から検討しよう。

三章　シャブダンとイスラーム

前章において考察したように、シャブダンは遊牧英雄バートゥルとしての権威を生涯にわたって保ち、またそれを強調しつづけた。その一方で、シャブダンは、当時のクルグズ社会で必ずしも支配的であるとは言い難かったイスラームを熱心に信仰するとともに、その敬虔で、ある意味「正しい」ムスリムとしての姿を民衆に示そうとしていたことが窺える。実際に、前述の民族学者アブラムゾンは、シャブダンが儀礼を厳格に遂行する様子を報告している。彼によれば、シャブダンは毎日夜明け前に起床して沐浴し、礼拝（ナマーズ）をあげていた。またある時、シャブダンがモスクで礼拝していた最中に大きな地震が起こると、モスクにいた人々は、皆すぐさま外に避難したが、シャブダンはただひとりモスクに残り、礼拝を最後までやり遂げたという[57]。イスラームに傾倒するシャブダンの逸話は、後述するようにこのほかの史料からも確認することができるが、それらは彼のイスラームへの熱意を伝える一方で、彼が生前に敬虔なムスリムとしてのイメージを地域社会にアピールしていたことのひとつのあらわれであるとも考えられる。そして結論から述べれば、このイスラームという要素は、前章で検討したバートゥルとしての資質に加えて、シャブダンの首領としての権威の源泉となっていた。以下で詳しく検討しよう。

ムリードとしてのシャブダン

シャブダンとイスラームとの関わりは、おおきく二つに分けて考えることができる。すなわちひとつめは、スーフィズムに象徴される伝統的なイスラームであり、もうひとつは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて高まりを見せつつあった、新たなイスラーム潮流との関わりである。

クルグズたちがイスラームを受容したのは一六世紀とされる。仏教を信仰するジューンガルのような異教徒と長期間にわたって抗争を繰り返したことを背景として、彼らがムスリムとしての意識を明確に有していたことが知られているが[59]、その一方で彼らが実践していたイスラーム信仰は、土俗性や呪術性などの点で、遊牧的な性格を色濃く残したものであった。そのことについては、先行研究や同時代史料を交えつつ別稿のなかであきらかにした[59]。

このように異端的な性格を帯びたものではあったが、クルグズ遊牧社会におけるイスラーム化は確実に進展していた。その度合いは、とくにコーカンド・ハン国と密接な関係にあったフェルガナ盆地周辺のクルグズにおいてより顕著であり、天山山脈北部のセミレチエにもその波は及んでいた。こうしたイスラーム化の背景にあったのがスーフィズムである。小松久男が指摘するように、中央アジア定住地域、とりわけフェルガナ地方を根拠地とするナクシュバンディー教団系のイシャーン（スーフィー教団の導師）は、天山山中に入ってクルグズ遊牧民から根気強くムリード（弟子）を徴募していたという[60]。

シャブダンがいつ、何を契機としてイスラームに傾倒するようになったのか。このことについては、史料的な制約もあり定かではない。とはいえ、その背景にこうしたスーフィズムの影響があったことはたしかであると思われる。実際に、シャブダンがイシャーンの熱心なムリードであったことは、史料から確認することができる。

概してイシャーンは各地のムリードを定期的に訪問しては大量の家畜を進物として受領していたことが指摘されているが[61]、ピシュペク郡長タルィジンが一八九七年にセミレチエ州軍務知事に宛てた報告書によれば、シャブダンは、「イシャーンやホジャへの崇敬を高めつつあり」、彼らのために民衆から莫大な数の家畜を集めていたという[62]。また、アブラムゾンが行なった、前述の聞き取り調査では、イシャーンやホジャの多くは、おおよそ一〜二ヶ月のサイクルでシャブダンのもとに滞在したが、なかには一〜二年にわたって長期滞在する者もあったことが指摘されている[63]。

小松は、一八九八年にフェルガナ州東部で起こったいわゆるアンディジャン蜂起の主導者であるイシャーン・マダリーが名声を獲得した背景のひとつに、貧者に対する食事の提供があった点を指摘しているが[64]、前章において考察したシャブダンの「気前よさ」も、遊牧的価値観のみならず、こうしたスーフィズムの文脈とも併せて考える必要があるだろう。事実、シャブダンの没後に『セミレチエ州報知』に掲載された追悼文によれば、「〔シャブダン〕バートゥルの周りでは、何十人もの貧民が食べ物を与えられていた」[65]とし、アブラムゾンの調査記録は、「シャブダンのもとで食事を与えられた貧民（duvan）たちは、遊牧民の集落に入っていって、ムハンマドとシャブダンの偉業を讃えた」ことを伝えている[66]。

マッカを目指す遊牧英雄

二〇世紀に入ると、前節で見たようなスーフィズムを媒介とする、いわば伝統的なイスラームのありかたに加えて、シャブダンのイスラームへの関わり方はより可視的な性格を帯びるようになっていったことが指摘できる。一例として、シャブダンは一九〇〇年にモスクの建設をセミレチエ州当局に願い出て、その建設を実現させている（**図3**）。当時、セミレチエにおいて遊牧民によるモスクの建設は皆無ではないにしても、きわめて稀なことであった。

またモスクの建設もさることながら、特筆すべきは、イスラーム教の聖地マッカとマディーナへの巡礼、すなわち「ハッジ」である。一九世紀後半以降、蒸気船や鉄道をはじめとする交通機関の発達を背景として、イスラーム世界の僻地からも巡礼者が訪れるようになったことがよく知られているが[67]、領内に多くのムスリム人口を抱えるロシア帝国も、こうした潮流と無縁ではなかった。ロシア帝国統治下の中央アジアにおいては、一九世紀末以降、鉄道の敷設の進展にともなって比較的多くのムスリムが聖地を目指すようになり、こうした流れのなかで、シャブダンも一九〇四年一二月から翌一九〇五年五月にかけてハッジを敢行したのである。

ハッジを終えて帰郷した者は故郷で敬意の念をもって迎えられ、その社会的威信は高まり、「ハーッジー」という尊称で呼ばれたことが知られているが、シャブダンにとってもそれは新たな権威の源となったと考えられる。その証左としてまず注目したいのは、彼の印影である。**図4**に示した印影は、シャブダンがハッジから帰還した一九〇五年に作成した文書に添付されたも



図3：シャブダンのモスク（クルグズ共和国中央国立映像音響写真史料館蔵）

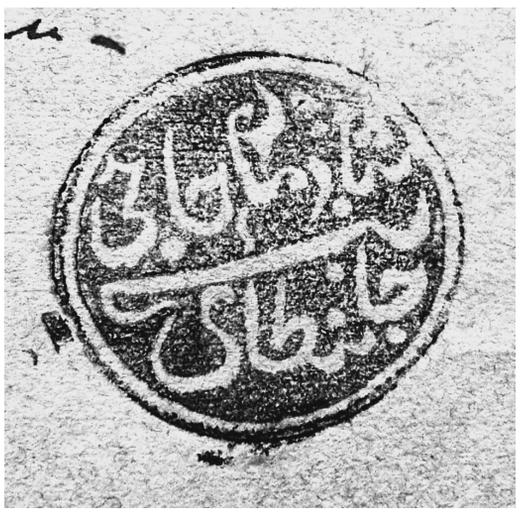


図4：シャブダンの印影
（カザフスタン共和国国立中央公文書館蔵）



図5：イフラームに身を包むシャブダン（中列左から3人目）
（クルグズ共和国中央国立映像音響写真史料館蔵）

のであり[68]、そこには、「シャブダン・ハーッジー・ジャンタイ」というように、シャブダンの名前にハーッジーという尊称が付されている。

ついで、シャブダンの没後一九一二年に建立された墓碑を見てみよう。それは天然石で作られ（縦約八五cm、横約四〇cm、奥行き約一五cm）、両面にアラビア文字テュルク語で、シャブダンの系譜とその功績が刻印されている。まず、シャブダンの先祖についての記述を見てみると、「アタケ・バートゥル、その父はトゥナイ・バートゥル」といったように、バートゥルの尊称が付されている。これに対し、シャブダンについては、

シャブダン・バートゥル・ハーッジー

と記されている。このように、彼が従来有していた「バートゥル」という尊称に、「ハーッジー」というイスラーム的な尊称が付加されるかたちで、「バートゥル・ハーッジー」という新たな尊称が作り出されていたことは注目に値する。もちろん、当時シャブダンは、単に「バートゥル」としてのみ呼ばれることもあり、この尊称が恒常的に用いられていたわけではない。しかしながら、前述のオスマンアリーやサブル・ガブドゥルマーンの記述にも、「バートゥル・ハーッジー」や「ハーッジー・バートゥル」という尊称が散見されることを考慮すれば[69]、シャブダンに対するこの尊称が、当時のクルグズ社会において比較的広く認知されていたと考えることができるだろう。

それでは、シャブダンを単に「バートゥル」ではなく、「バートゥル・ハーッジー」という尊称で呼ぶようになったことは何を意味しているのだろうか。むろんそれは、彼が持つイスラームの熱心な信奉者・実践者としての側面に敬意を表わすためであったのだろうが、それが用いられた背景には、シャブダン本人、あるいはその周囲の人物たちに、「バートゥル」という従

来の遊牧的な尊称に、イスラーム的な要素を付け加えることで、その権威の強化を図ろうとする思惑があったものと推測される。

このように、ハッジによって権威の強化を図ろうとする志向はシャブダンに限られたことではなかった。たとえば、一九一〇年一月に、アト・バシ管区長官がセミレチエ州軍務知事に宛てた報告書のなかで、

> 民衆のあいだで影響力を維持するために、マナプたちはほかの「徴発」から幾分際立った手法に頼るようになりました。現在マッカへの巡礼者の数は目立って増えていますが、巡礼から戻ってくると彼らは「ハーッジー」と名乗って、特別な地位を得ています[70]。

というように、ほかのマナプたちも、ハッジによって自らの権威や影響力を維持しようとしていたことを指摘している。このことに関連して、翌一九一一年にピシュペク郡長が郡内の査察に赴いた際に押収した、当時クルグズのあいだで出回っていたという「決議文」（*prigovor*）は示唆的である。同文は、まずその冒頭において以下のよう述べる。

> マッカおよびマディーナへの巡礼者の数は毎年増加している。今後セミレチエに計画されている鉄道が完成すれば、その数はますます増えるだろう。カラ・キルギズ〔＝クルグズ〕の巡礼者たちはマッカに独自の居所を持たないため、異国の人々と所構わず一緒になることを余儀なくされている。彼らはたいへん頻繁に、我々のような経験の浅い不慣れな巡礼者を侮辱し、盗みをはたらく。それゆえピシュペク、プルジェヴァリスク郡のすべてのカラ・キルギズはマッカとマディーナに自分たちの居所を望み、〔その建設のために〕献金を募る[71]。

こうした事情を踏まえつつ、決議文の後半においては、「この運動の取りまとめ役として、ソルト族地域においてはサグンバイ・サティバルディン〔マナプ〕、サヤク、そしてサルバグシ族地域においてはアマン・シャブダノフ〔マナプ〕を選出する。また献金の徴収は、ソルト族地域ではスライマン・コルチ〔マナプ〕、サヤク族地域ではムルザベク・ディカンバイ〔マナプ〕、サルバグシ族地域ではムラタリ・エリタイ〔マナプ〕が行なう」ことが宣言されていた[72]。この決議文からは、当時クルグズのあいだでもにわかに流行しつつあったハッジにおいて、マナプたちが主導権を発揮しようとしていたことが窺える。

このように、シャブダンをはじめとするマナプたちが、ハッジに新たな権威の源泉を求めるようになったことは、中央アジアはもちろんのこと、ロシア帝国の枠組みをも超えたイスラーム世界としての広がりが彼らのなかで意識されるようになったことを示唆している。このことに関して、シャブダンの息子カマルは伝記のなかで以下のような興味深いエピソードを紹介している。それによれば、シャブダンはハッジに赴いた際、オスマン帝国のスルタンにヒジャーズ鉄道建設費用として二〇〇〇ルーブルを寄付し、スルタンから賞状（**図6**）と金メダルを授与された。ハッジから戻ると、シャブダンはセミレチエ州軍務知事の許可を得て、ロシアから授与されたほかのメダルとともに、そのメダルをカフタンに身に帯びていたという[73]。これはシャブダンがオスマン朝との特別な政治的な関係を有していたことを意味するものではないが、彼がメダルを顕示していた背景には、オスマン朝のスルタンを盟主とするスンナ派イスラーム世界のなかに自らを位置づける意味合いもあったものと想像される。

また、他地域のムスリムとシャブダンとの関係について、オスマンアリーは、『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』において、以下のように記している。

> シャブダン・バートゥルの噂は遠く離れた国にも届き、彼のもとに〔次のような人びとが〕やって来た――アンディジャンからはイシャーンが、ナ

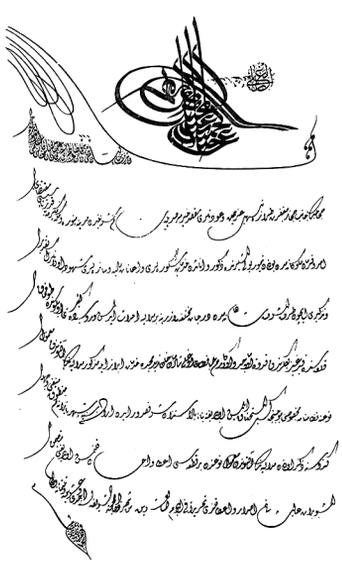


図6：オスマン朝スルタンからシャブダンに授与された賞状（Janïl Abdïldabek Kïzï氏蔵）

マンガンからはホジャが、ブハラからはムッラーが、イランからはキジルバシが、マッカからはシャイフが、マディーナからはサイイドが、カシュガルからはデルヴィーシュが〔やって来た〕[74]。

こうした人びとが、実際にシャブダンのもとを訪れたのか否かについて論証することはむずかしいものの、すくなくとも、彼が、ロシア帝国という枠組みを超えたイスラーム世界との結びつきを多分に意識し、そのなかに自らを位置づけようとしていたことはあきらかであるといえよう。

イスラームの代弁者としてのシャブダン

以上の考察からあきらかになったように、シャブダンはイスラームを熱心に信奉し、またそれを介して自らの権威の強化を図っていた。それに加えて、地域社会におけるイスラームの代弁者としての役割を果たそうとしていたことも史料から浮かびあがってくる。

そのことを端的に象徴しているのは、一九〇五年革命をめぐるシャブダンの動向である。帝都サンクトペテルブルグに端を発する一九〇五年革命が、中央アジアにおいてもすくなからぬ反響を呼んだことは、先行研究においても指摘されてきた。たとえば、カザフ草原では、一九〇五年六月にセミパラチンスク州で集会が開かれ、ロシア政府の宗教への介入や、ロシア化政策、植民政策などを批判し、教育の改善や地方行政でのカザフ語の使用を求める一万数千名の請願が出された[75]。これとほぼ同時に、セミレチエにおいても、シャブダンを中心として、政府中枢への請願の送付が試みられていた。以下に示すのは、公文書館に収蔵されたその請願（*petitsiya*）の写しの一部であり、その冒頭には、

> 陸軍中佐のシャブダン・ジャンタエーフ〔が〕、ムスリムであるトルキスタン地方のカラ・キルギズ〔＝クルグズ〕とセミレチエ州のキルギズ・カイサク〔＝カザフ〕を代表して[76]。

と記されているように、クルグズとカザフたちの、「ムスリム」としてのアイデンティティが前面に出され、シャブダンが彼らムスリムを代表して大臣会議議長に請願する、という体裁をとっていた。これと同様に、請願の内容もイスラームに関する事柄に焦点が置かれていた。すなわちそれは、トルキスタン地方のクルグズとセミレチエのカザフにひとつの聖職者協議会（*Dukhovnoe sobranie*）を創設し、婚姻、家族、相続をめぐる訴訟案件の審理や、聖職者（ムフティー、カーディー、イマーム）の管理をはじめ、モスクの建設の承認、ならびにマクタブやマドラサといった教育施設の創設と教師の任免をその宗務局に委ねることを求めるものであった[77]。

こうした請願の内容が、シャブダン本人の意向をはたしてどれほど反映したものなのかということについては必ずしもあきらかではない。というのも、聖職者協議会の設置に代表されるような同様の要求が、カザフ草原における請願運動のなかでも触れられていた点を考慮すると、そのような動きから何らかの形で影響を受けていた可能性も十分に考えられるからである。また、後述するように、この当時の中央アジアには、いわゆる「ジャディード」と呼ばれるタタール人たちが進出しており、シャブダンも彼らとのつながりを有していたことが知られている。それゆえ、同請願がそうしたタタール人の意向を反映したものであった可能性も否定できない[78]。さらに、たとえイスラーム化の波が及んでいたとはいえ、こうした一連の要求に見合うほどに、クルグズ社会においてイスラームが普及・浸透していたのかということも疑わしい[79]。

ただし、すくなくともシャブダンがこの地域のイスラームの代弁者を自認するとともに、周囲からもそのように目されていたことはたしかであると思われる。

その証左として、たとえば、教育をめぐる彼の動きにはそのような側面を見て取ることができる。ロシア軍政当局は、一八八〇年代中頃にまずタシュケントにおいて「ロシア語・現地語学校」（*russko-tuzemnye shkoly*）の設立を開始し、一九世紀末になるとその流れはカザフ草原やセミレチエにも及び、「ロシア語・キルギズ語学校」の建設が検討されるようになった[80]。こうした流れを受けて、一八九六年三月前出のピシュペク郡長タルィジンは郡内の有力者たちに対し、ロシア語・キルギズ語学校の開設を打診した。この申し出に対するシャブダンの反応について、タルィジンはつぎのように記している。

> 私は有力者たちにキルギズのロシア語教育の問題を提起しました。その際、彼らの多くが無条件で賛成しました。しかしシャブダンだけは、この学校をモスクの付属とすること、およびイスラーム教の習得を必須とするとい

う条件を付けてきました。このため私は学校事業をほかのキルギズたちとともにはじめました。すべての有力者が同意した際、シャブダンは皆から後ずさりし、〔しぶしぶと〕合意したのです[81]。

ここからは、シャブダンがイスラーム教育を重視していたことがあきらかであり、シャブダンのこうした態度は、大臣会議議長に宛てて書かれた前述の請願書において、ギムナジアに通うムスリム学生に対するイスラーム教育を求めていたことにも確認することができる[82]。

このように、シャブダンはロシア学校におけるイスラーム教育の導入を求める一方で、自分自身でも独自にイスラーム式教育に取り組んでいたことを指摘したい。とりわけ彼は、いわゆる「新方式教育」（ジャディード）運動に関与していた。よく知られるように、この運動は、ロシア帝国内においてムスリムがロシア人と対等に渡り合うためには教育改革が不可欠であるとの認識から、伝統的な寺子屋形式のマクタブを改革して、イスラームの基礎に加え、母語とロシア語の読み書きや算数、歴史、地理などの世俗化科目を、教科書を用いて学年別に教える近代的な初等教育の導入を目指すものであった。それは当初、ヴォルガ・ウラル地方のタタール人を中心に展開され、二〇世紀に入るとタタール人の商業ネットワークにのって中央アジアにも普及した[83]。クルグズもこうした潮流と無関係ではありえなかった。このことについて、オスマンアリーは、『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』のなかでつぎのように記している。

> 一九〇一年から一九〇二年にかけて、トロイツクの街からトクマクの街に老ザーキル・ワッハーブ殿が来た。このとき生徒が大変多くなり、トクマクに住むチャヴォコフという我々の部族の人が子供たちを〔トクマクの〕街で学ばせないよう命じ、追い出しはじめた。シャブダン・バートゥルの願いや、我らが教師ザーキル・モッラーの努力のお陰で子供たちが罰せられることはなかった。年々〔生徒は〕多くなっていった。〔…〕ウファの街に行ってガリーイェ・マドラサに入る者たちも現われた。また、謝礼を払って、大きな街から教師を招く者も現われた[84]。

この記述からは、シャブダンがタタール人のジャディードであると思われるザーキルという人物の教育活動に共感し、それを支援していたことが窺える。彼が教育活動に積極的に取り組んでいたことは、アブラムゾンがその調査記録のなかで、シャブダンは自分のモスクにタタール人のイマームを招聘するとともに、長男のヒサメトディンは新方式学校を創設し、カザンからタタール人教師を招聘したと述べていることからもあきらかである[85]。

以上みてきたように、本章ではシャブダンの動向をイスラームを軸として考察した。史料的制約から、その様態を詳細に描きだしえたとは言い難いものの、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、シャブダンをはじめとするマナプたちのなかに、イスラームに積極的に関与しようとする志向が顕在化していたことはたしかである。ハッジという行為に象徴されるように、彼らは自らをイスラーム世界のなかに位置づけることで、それを新たな権威の源泉とし、またその一方で、イスラーム世界とクルグズ社会とを結びつける媒介者となり、その代弁者となっていった。ロシア統治の進展は、マナプたちの軍事指導者としての実質的な役割を喪失させた。しかし同時に、ロシア統治はクルグズ社会とほかのイスラーム地域とをつなぐ役割をも果たし、そのようななかで彼らは、クルグズ社会における新たな存在意義を獲得する道を、イスラームのなかに見いだそうとしたのである。

終章　統合から反乱のシンボルへ

以上で、ロシア帝国の中央アジア支配における現地民コラボレーターの動向とその権威の様態について、クルグズの一首領であるシャブダンに焦点を当てて考察した。ロシア統治下におけるシャブダンの動向や権威は、彼のロシア帝国に対する軍事奉仕と引き替えに授与された陸軍中佐という軍位にすくなからず起因していたことは否定できない。しかし、その内実を詳細に検討すれば、それが必ずしもロシア帝国とシャブダンという二項関係の枠組みで説明がつくものではないことがあきらかである。すなわち、シャブダンの権威は、何よりもまず中央ユーラシアの遊牧的伝統に根ざした遊牧英雄、バートゥルとしての資質にもとづくものであった。とくに中央アジアの征服が終了し、マナプが軍事指導者としての役割を実質上喪失してゆくなかで、シャブダンがそうした遊牧的な権威をむしろ強調し、その体現者であることを現地社会にアピールしようとしていたことは興味深い事実であるといえる。

ところが、そうした従来の遊牧的権威に加えて、シャブダンはロシア統治

が進展するなかでイスラーム世界との結びつきを強めてゆくこととなった。彼の晩年に冠せられた尊称、「バートゥル・ハーッジー」は、まさにそれを象徴するものであったといえる。こうしたイスラーム的な権威の付加は、軍事指導者としての実質的な意味を喪失し、形骸化するマナプの権威をいわば補強するための意味合いを有していた。またそれは、シャブダンがロシア統治の仲介者のみならず、イスラームの代弁者としての役割を積極的に自認するようになったことのひとつのあらわれでもあったとも考えられる。それでは、ロシア軍政当局はこうしてシャブダンがイスラーム世界との関わりを強めてゆくことにどのように対応したのだろうか。本章ではこの点について確認したうえで、序章においても述べたように、シャブダンのそうした動向とロシア統治との相互作用について触れておきたい。

まず、三章の考察からもあきらかなように、ロシア軍政当局はシャブダンがイスラームとの関係を強めつつあったことを明確に認知していた。さらにロシア人軍政官のなかには、そうした動きに危機感を抱き、積極的な阻止を唱える者もいた。たとえば、一九世紀末にピシュペク郡長としてクルグズの統治にあたったタルィジンは、同郡へのロシア式学校の導入を企図していたが、その背景のひとつには、同郡のクルグズたちをフェルガナ地方から到来するイシャーンの影響から切り離す意図があった。タルィジンはまた、クルグズの学校設置にかかる費用を、彼らがイシャーンに支払う多額の寄付の流用によって賄おうとしていたのである[86]。またもうひとつの例としては、一八九八年に起こったアンディジャン蜂起の後にトルキスタン総督に就任したS. M. ドゥホフスコイが挙げられる。彼は汎イスラーム主義の脅威を強く訴えたことで知られているが[87]、シャブダンによるモスク建設の動きを知ったドゥホフスコイは、はたしてその阻止を強く求めた。彼はセミレチエ州軍務知事に対して、「何らかの口実を見つけてモスク建設を阻止するよう」求めたという[88]。

このように、ロシア軍政当局のなかにイスラームの影響力を積極的に抑止しようとする動きが存在していたことは事実であるが、それはあくまでも例外的なものであった。ロシア軍政当局は、シャブダンをはじめとするマナプたちを、ロシア支配に敵対的な汎イスラーム勢力の一員と見なすよりは、むしろ、民衆をそうした外部の影響から守るうえで都合の良い防波堤として位置づけていたのである。たとえば、トクマク地区警察署長は、一九〇九年に当時のトルキスタン総督、A. V. サムソノフに宛てた報告書において、以下のように述べている。

> 民衆に対する地元の聖職者の影響力は、完全にマナプたちに依存しております。現地のムッラーたちはマナプの腹心となっており、マナプの影響力なしに現在の地位を得たムッラーは誰ひとりとしておりません。ムッラーは、個人的かつ社会的利益におけるマナプたちの視点の伝達者であり、ムッラーたちが民衆に政治的影響力を行使することはないのです[89]。

このなかで彼が、ムッラーたちがマナプの影響下にあるとし、汎イスラーム主義への警戒感を強める総督の懸念を打ち消そうとしている点は注目に値する。またここで、ほぼ同時に進展していた、シャブダンへの土地分与をめぐる案件にも触れておく必要があるだろう。

二〇世紀に入った後、とりわけ一九〇五年革命後に成立したストルィピン政権の強力な主導のもとで、ロシア人をはじめとするスラブ系農業移民政策は中央アジアにおいても展開されるようになった[90]。クルグズの遊牧地域であるセミレチエにはとくに農業移民が集中していたが、当然のことながら、殺到するこれらの移民を入植させるためには、現地の遊牧民からの大規模な土地収用が不可欠であった。それを首尾良く遂行するために、当時トルキスタン総督の座にあったサムソノフは、シャブダンに約四〇〇ヘクタールに及ぶ広大な土地を特別に分与して懐柔することで、土地収用に対する遊牧民の抵抗を封じ込めようとしたのであった。帝国中央政府はこうした特別措置に対して否定的であったが、彼は一九一〇年六月に、移民政策を統括する土地整理農業総局長官のA. V. クリヴォシェインに書簡を送り、シャブダンが移民政策を推進するうえでの有力な協力者たりうることを力説した[91]。この書簡で興味深いのは、その最後に書き添えられた次の件である。

> 警察力が完全に欠如する状況にあって、シャブダン・ジャンタエーフはカザン・タタールによる扇動活動と闘争するうえでのきわめて望ましい対抗勢力（*protivoves*）なのです[92]。

三章で考察したように、シャブダンはロシア統治の仲介者のみならず、タタール人とも結びつつ、「イスラームの代弁者」としての役割をも有するようになっていた。サムソノフがその点に関してどの程度把握していたのかは

定かではないものの、シャブダンのそうした側面について無知であったことはありえない。しかしながら総督は、シャブダンを敵視して却けるのではなく、むしろ「汎イスラーム主義」との闘争を行なううえで重要な協力者として位置づけていったのである。長縄宣博は、タタール人の事例に即しながら、ロシア帝国が、イスラームの代弁者としての性格を帯びるようになったコラボレーターに対して警戒感を持ちつつも、統治の協力者として頼らざるをえなかったことを指摘しているが[93]、シャブダンをめぐるサムソノフの対応にも、それと同様のジレンマを鮮明に見て取ることができよう。

とはいえ、そもそもシャブダンがイスラームの代弁者としての顔を有するようになった背景には、ロシア帝国がそれを助長していた側面がすくなからずあったということを指摘しておかなければならない。シャブダンに限らず、ロシア帝国が意図せずして現地民のイスラーム化を助長したという指摘は、前出のドゥホフスコイをはじめとして同時代のロシア軍人たちによってもなされていた。その顕著な事例として、中央アジアにおける鉄道の敷設は、帝国中央への統合を強化するよりもむしろ、現地民のハッジを促進し、イスラーム世界との結びつきを助長することになったというパラドクスがよく知られているが、シャブダン自身もロシア帝国が敷いた鉄道を乗り継いでハッジを行なったひとりであった。さらに、ロシア帝国がシャブダンに陸軍中佐位を授与した点も看過できない。ハッジに赴くにせよ、モスクを建てるにせよ、イスラームの代弁者としての体裁を整えるためには、当然のことながら多額の資金が不可欠である。シャブダンがこうした活動を活発化させることができた背景には、陸軍中佐位に付随して支給された年金をはじめとして、ロシア帝国側から供与された金銭的援助の存在が大きかったであろうことは想像に難くない。

さらにいえば、こうしたイスラーム的側面のみならず、シャブダンが終生にわたって顕示していた遊牧的権威もまた、ある意味ではロシア帝国の支配と不可分の関係にあった。というのも、シャブダンがバートゥル、つまり遊牧英雄としての権威をより広く示すうえで、ロシア帝国の軍事侵攻が彼に軍事指導者としての活躍の場を実質的に提供すべく作用した。つまりシャブダンのバートゥルとしての権威は、皮肉にもロシア帝国の進出によって強化されることになったのである。

以上のことから、二〇世紀初頭にシャブダンに冠せられた「バートゥル・ハーッジー」という尊称は、ロシア統治とは無関係なものだったのではなく、むしろ帝国の軍事侵攻と統治のいわば副産物として生まれたものでもあったといっても、決して過言ではないだろう。

＊　＊　＊

最後にシャブダン没後の顛末についてすこし触れ、本稿の結びとしたい。ロシア統治の、いわばひずみから生じたともいうべき、この「バートゥル・ハーッジー」という尊称は、すくなくともシャブダンの存命中はロシア帝国の支配に直接的な害を及ぼすことはなく、むしろシャブダンを介した属人的統治を遂行するうえで有効に作用した。また、シャブダンの側でも、イスラームを旗印にロシアに背こうなどとは考えていなかっただろう。むしろ、彼はあくまでも帝国統治体制の枠組みのなかで、新たなイスラーム潮流を介した教育の改善を構想していたものと考えるのが妥当だろう。しかし、一九一二年にシャブダンがこの世を去ると、状況は変化してゆくこととなった。

ロシア軍政当局は、シャブダンを統治のコラボレーターとして重用した一方で、その息子たちについては父親同様に特別扱いすることはせず、彼らが世襲エリート化することをむしろ積極的に阻止しようとした。すなわち、シャブダンの息子たちに対しては、彼が生涯有していた陸軍中佐位の継承を認めなかっただけでなく、再三にわたる彼らの請願にもかかわらず、特別分与地の世襲を一切認めず、移民入植用地として速やかに回収したのである[94]。

こうした措置に対する彼らの不満は、一九一六年に爆発することとなる。序章でも述べたように、同年、徴用令の発布を端にロシア帝国統治下の中央アジア全域において大規模な反乱が勃発したが、とりわけセミレチエ州南部のクルグズ人地域においては、土地収用への不満を背景として、反乱は激しい様相を呈した。こうしたなかにあって、民衆が反乱の指導者として担ぎあげたのは、ほかでもないシャブダンの息子たちであった。彼らを頭目とする反徒たちは、かつてシャブダンが建設したモスクで反乱の契りを結ぶとともに、広い範囲に檄文を送付していたことが知られているが、それは「バートゥル・ハーッジーの名のもとに」反徒の結集を呼びかけるものであった[95]。シャブダンというひとりの有力なコラボレーターは、生前は現地社会で権威を保つことにより、間接的にロシア統治を補強する役割を果たしたが、皮肉なことにその死後は、ロシア統治に対する反乱のシンボルに転じた

のである。本稿冒頭に掲げたクロパトキンの言葉は、こうした状況を目の当たりにして発せられたものだったのである。

シャブダンの息子たちは移民村落を襲撃し、それらを焼き討ちにした後、ロシア領トルキスタンを離れ、天山山脈を超えて東トルキスタン、すなわち当時の中華民国領新疆省に逃れた。一方、ロシア軍政当局は大規模な軍隊を投入し、反乱の鎮圧に乗りだした。シャブダンのモスクもまた、そのなかで焼き払われたのであった。

【付記一】

本稿は、秋山徹「ロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威について――遊牧世界とイスラーム世界の間で」『東洋史研究』七一編三号、二〇一二年、二九―五七頁に大幅な加筆・修正を加えたものである。

【付記二】

本稿は、平成二五年度日本学術振興会科学研究費補助金・研究活動スタート支援「イスラーム動態からみる近代中央アジアの遊牧社会史研究――クルグズを中心に」の成果の一部である。

【註】

（1）*Vosstanie 1916 goda v Srednei Azii i Kazakhstane: Sbornik Dokumentov*, Moskva, 1960, pp.345-346. なお、本稿に示される年代はすべてユリウス暦である。

（2）本稿において、「中央ユーラシア」は、クリミア半島、ヴォルガ・ウラル地方、カフカース、中央アジア、アフガニスタン、西シベリアなどの諸地域を含む地域概念として使用する。なお、本書で使用する「中央アジア」は、現在の国家区分で言うところのウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン、トルクメニスタン五カ国に中国新疆を加えた地域を指すものとする。

（3）一九一六年反乱についてはこれまで多くの研究蓄積があるが、代表的な研究として、西山克典『ロシア革命と東方辺境地域――「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会、二〇〇二年、一六五―一九七頁を参照。

（4）塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムという難問』岩波書店、二〇〇八年、五八頁。

（5）宇山智彦「『個別主義の帝国』ロシアの中央アジア政策――正教化と兵役の問題を中心に」『スラヴ研究』五三号、二〇〇六年、五四頁。

（6）原語を引用する際は、ローマ字で転写して表記する。転写方法は、小松久男ほか（編）『中央ユーラシアを知る事典』（平凡社、二〇〇五年）付録の翻字表（五九二―五九三頁）にしたがう。その際、テュルク系諸語はローマン体、ロシア語はイタリック体で表記する。

（7）Ronald Robinson, “Non-European Foundations of European Imperialism: Sketch for a Theory of Collaboration”, in Roger Owen & Bob Sutcliffe eds., *Studies in the Theory of Imperialism*, London, Longman, 1972, pp.117-142.

（8）ロシア帝国の中央アジアへの進出ならびに統治におけるタタール人の位置づけとその変遷については、Remnev A.V., “Tatary v Kazakhskoi Stepi: Soratniki i Sopernik Rossiiskoi Imperii”, *Vestnik Evrazii*, no.4, 2006, pp.5-31を参照。

（9）中央ユーラシアにおける知識人に関しては多くの研究が存在するが、代表的な成果として以下を参照。小松久男『革命の中央アジア――あるジャディードの肖像』東京大学出版会、一九九六年、宇山智彦「二〇世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観――M. ドゥラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に」『スラヴ研究』四四号、一九九七年、一―三六頁、Adeeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform : Jadidism in Central Asia*, Berkeley, University of California Press, 1998.

（10）Uyama Tomohiko, “A Strategic Alliance between Kazakh Intellectuals and Russian Administrators: Imagined Communities in *Dala Walayatining Gazeti* (1888-1902)”, in Hayashi Tadayuki ed., *The Construction and Deconstruction of National Histories in Slavic Eurasia*, Sapporo, Slavic Research Center, Hokkaido University, 2003, pp.237-259.

（11）Uyama Tomohiko, “Two Attempts at Building a Qazaq State: The Revolt of 1916 and the Alash Movement”, in Stéphane A. Dudoignon and Komatsu Hisao eds., *Islam in Politics in Russia and Central Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)*, London, Kegan Paul, 2001, pp.77-98. また、アンディジャン蜂起をめぐる現地のムスリム知識人の認識について、小松久男「聖戦から自治構想へ――ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン」『西南アジア研究』六九号、二〇〇八年、五九―九一頁を参照。

（12）コラボレーターの位置づけをめぐっては以下の研究を参照した。根本敬『抵抗と協力のはざま――近代ビルマ史のなかのイギリスと日本』岩波書店、二〇一〇年、栗本英世「討伐する側とされる側――すれちがう相互認識」栗本英世、井野瀬久美恵（編）『植民地経験――人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院、一九九九年、一四六―一六九頁。

（13）たとえば、カザフ知識人のM. ドゥラトフはカザフ社会の有力者に対して厳しい目を向けていたことが知られている（宇山「二〇世紀初頭におけるカザフ知識人」一〇頁）。

（14）ロシア領中央アジア定住地域の動向に関しては、Alexander Morrison, *Russian Rule*

in Samarkand: 1868-1910 : A *Comparison with British India*, Oxford, Oxford University Press, 2008, 塩谷哲史『中央アジア灌漑史序説――ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』風響社、二〇一四年を参照。また、清朝統治下東トルキスタンにおけるベク制度をめぐる近年の研究成果として、小沼孝博「ベク制度の創設――清朝公文書による東トルキスタン史研究序説」『内陸アジア史研究』二二号、二〇〇七年、三九―五九頁、河野敦史「『七人のホージャたち』の侵入事件（一八四七年）におけるベクたちの動向――カシュガルのベクたちによる防衛を中心として」『内陸アジア史研究』二九号、二〇一四年、一一一―一三三頁を参照。

（15）たとえば、以下の研究を参照。Virginia Martin, "Kazakh Chinggisids, Land and Political Power in the Nineteenth Century: A Case Study of Syrymbet", *Central Asian Survey* 29, no.1, 2010, pp.79-102, Gulmira Sultangalieva, "Kazakhskoe Chinovnichestvo Orenburgskogo Vedomstva: Formirovanie i Napravlenie Deyatel'nosti (XIX)", *Acta Slavica Iaponica*, Tomus 27, 2009, pp.77-101, Dzhampeisova Zh., *Kazakhskoe Obshchestvo i Pravo v Poreformennoi Stepi*, Astana, 2006.

（16）日本においてクルグズは通常「キルギス」と呼ばれるが、彼ら自身の発音に厳密にしたがうならば「クルグズ」(Qïrghïz) と呼ぶのが正しい。そこで、本稿においても、彼らの自称にしたがい「クルグズ」と記すことにする。なお、ロシア帝政期およびソ連時代初期の一九二五年に至るまで、公的文書等においてクルグズはカザフとともに「キルギズ」(kirgiz) と総称された。場合によってクルグズは「カラ・キルギズ」(kara-kirgiz) あるいは「ディコカメンヌィ・キルギズ」(dikokamennyi-kirgiz)、カザフは「キルギズ・カイサク」(kirgiz-kaisak) や「キルギズ・カザク」(kirgiz-kazak) として区別されることもあった。本稿では史料引用に際しては原文表記にしたがい、それがクルグズを指す旨を〔括弧〕で補足する。

（17）秋山徹「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立――部族指導者「マナプ」の動向を手がかりとして」『史学雑誌』一一九編八号、二〇一〇年、一―三五頁、同「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開――統治の仲介者としてのマナプの位置づけを中心に」『スラヴ研究』五八号、二〇一一年、二九―五九頁。

（18）秋山徹「ロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威について――遊牧世界とイスラーム世界の間で」『東洋史研究』七一編三号、二〇一二年、二九―五七頁。

（19）ロシア帝国領中央アジア、就中本稿の舞台となるセミレチエ州ピシュペク郡が属したトルキスタン総督府は一九一七年の帝政崩壊に至るまで陸軍省の管轄下に置かれた。ただし、一八八二年から一八九九年まで、同州はトルキスタン総督府の管轄を離れ、当時内務省の管轄下にあり、カザフ草原を統治するステップ総督府の管轄下に入った。いずれにせよ、植民地現地で実際に統治に当たったのは、総督以下、陸軍軍人であり、彼らは軍事のみならず民政をも管轄した。こうした事情を考慮して、本稿は植民地のロシア権力を、「軍政当局」という表現で呼ぶこととする。

（20）カザフスタン共和国国立中央公文書館（Tsentral'nyi Gosudarstvennyi Arkhiv Respubliki Kazakhstan: 以下 TsGA RK と略記）、ロシア国立歴史文書館（Rossiiskii Gosudarstvennyi Istoricheskii Arkhiv: 以下 RGIA と略記）。

（21）本稿では、『ステップ地方新聞』や『セミレチエ州公報』といった植民地軍政当局が発行した官報類のほかに、タタール語雑誌『シューラー』(*Shūrā*) が含まれることを付記しておく。とくに本稿では Sh.V. なる人物が一九一一年に同誌に寄稿した「クルグズについて」と題する論説、ならびにサブル・ガブドゥルマーンという人物によって書かれ、一九一二年に同誌に掲載された「天山の暗い窪地から」を参照する。これらの人物の素性は不明であるが、それらはクルグズのもとでの滞在体験にもとづいて書かれており、二〇世紀初頭の同社会をめぐる大変ユニークな史料であるといえる。にもかかわらず、この論説が研究に利用されたことは管見の限りない。

（22）Gavrilov M.F., "Manap", in *Sovremennyi Aul Srednei Azii (Sotsial'no-Ekonomicheskii Ocherk)*, Vypusk X, Tashkent, 1927, pp.201-215, Abramzon S.M., "Sovremennoe Manapstvo v Kirgizii", *Sovetskaya Etnografiya*, no. 3-4, 1931, pp.43-59, Abramzon S.M., "Manapstvo i Religiya", *Sovetskaya Etnografiya*, no.2, 1932, pp.82-97.

（23）'Uthmān 'Alī Sïdïkov, *Ta'rïkh-i Qïrghïz-i Shādmānīya*, Ufā, 1914.

（24）Kamal Shabdanov, "Atabïz Shabdan Baatïr Tuuralu Jazïlgan Tarikhi", Rybach'e, 1947 (Rukopisnyi Fond Natsional'noi Akademii Nauk Kyrgyzskoi Respubliki, no.1713).

（25）Sh.V. "Qïrgïzlar Tügrüsïnda", *Shūrā*, no.4, p.102. なお、"zverlik" は、「獣」や「野獣」を意味するロシア語 "*zver'*" に由来するものとして解釈した。

（26）後年、テュルク学者の K. K. ユダヒンが編纂した『クルグズ語―ロシア語辞典』（一九六五年、モスクワ）には、「マナプの地位」(*polozhenie manapa*) を意味するクルグズ語として "manaptik" という単語が採録されている（Yudakhin K.K., *Kirgizsko-Russkii Slovar'*, Moskva, 1965, p.515.）。

（27）TsGA RK, f.44, op.1, d.6619, l.104ob.

（28）"Pishpekdan Khat", *Dala Walayatining Gazeti*. no.38, 1897.

（29）秋山「ロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威」三六―三七頁。

（30）TsGA RK, f.19, op.1, d.1359, l.14.

（31）*Gavrilov*, "Manap", p.209.

（32）TsGA RK. f.44. op.1. d.6613. l.92ob.-93.

（33）Shkapskii O., "Pereselentsy i Agrarnyi Vopros v Semirechenskoi Oblasti", *Voprosy Kolonizatsii*, no.1, 1907, p.44.

(34) Kamal, "Atabïz Shabdan Baatïr", pp.21-22.
(35) Abramzon, "Sovremennoe Manapstvo", p.45.
(36) 松原正毅「遊牧社会における王権」松原正毅（編）『王権の位相』弘文堂、一九九一年、四三一―四三三頁。
(37) Ṣābir ʿAbd al-Mannuf, "Tïyānshān Tāwīning Tïran Chūqurlarindan", *Shūrā*, no.2, p.11.
(38) 松原「遊牧社会における王権」四三二頁。
(39) Gavrilov, "Manap", p.209.
(40) Kamal, "Atabïz Shabdan Baatïr", p.13.
(41) ʿUthmānʿAlī, *Taʾrïkh-i Qïrghïz-i Shādmānïya*, pp.54-55.
(42) Kazak Iliskii, "Pamyati Shabdana Dzhantaeva", *Semirechenskie Oblastnye Vedomosti*, no.240, 1913.
(43) 息子カマルによる伝記によれば、一八八三年にアレクサンドル三世の戴冠式終了後に官位を受け取るためにシャブダンが陸軍参謀本部を訪れると、同部長は「四階級をまたぎ超した規定外授与である」として難色を示した。この際シャブダンに助け船を出したのがクロパトキンであった。伝記によると、クロパトキンは「中佐はおろか、少将でも不十分である」と言って、シャブダンへの軍事官位の授与を強く推薦したという（Kamal, "Atabïz Shabdan Baatïr", p.18）。
(44) TsGA RK, f.44, op.1, d.695, l. 21-21ob.
(45) TsGA RK, f.44, op.1, d.695, l. 22.
(46) Sh.V. "Qïrgïzlar Tügrüsïnda", p.103.
(47) TsGA RK, f.44, op.1, d.695, l. 7-7ob.
(48) ʿUthmānʿAlī, *Taʾrïkh-i Qïrghïz-i Shādmānïya*, p.56.
(49) 作品の詳細については、米国の研究者ダニエル・プライアーによってなされた以下の校訂・英訳を参照されたい。Prior D.G, *The Šabdan Baatïr Codex : Epic and the Writing of Northern Kirghiz History*, Brill, Leiden-Boston, 2013.
(50) 坂井弘紀「英雄叙事詩の伝える記憶」塩川伸明・小松久男・沼野充義（編）『ユーラシア世界三――記憶とユートピア』東京大学出版会、二〇一二年、一六六―一七一頁。
(51) "Shabdān Jāntāy Ūghlining Wafāti", *Semirechenskie Oblastnye Vedomosti*, no.80, 1912.
(52) Ṣābir ʿAbd al-Mannuf, "Tïyānshān Tāwīning Tïran Chūqurlarindan", p.62.
(53) TsGA RK, f.44, op.1, d.6461, l. 38.
(54) Sokolov A., "O Kara-Kirgizakh", *Semirechenskie Oblastnye Vedomosti*, no.55, 1910.
(55) Sh.V. "Qïrgïzlar Tügrüsïnda", p.104.
(56) Sh.V. "Qïrgïzlar Tügrüsïnda", p.103.
(57) Abramzon, "Manapstvo i Religiya", p.92.
(58) Radlov V.V., *Iz Sibiri*, Moskva, 1989, pp.349-350.
(59) 秋山「ロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威」四五―四七頁。
(60) 小松久男「アンディジャン蜂起とイシャーン」『東洋史研究』四四編四号、一九八六年、一二頁。
(61) 小松「アンディジャン蜂起とイシャーン」一二頁。
(62) TsGA RK, f.44, op.1, d.695, l. 5ob.
(63) Abramzon, "Manapstvo i Religiya", p.93.
(64) 小松「アンディジャン蜂起とイシャーン」六頁。
(65) Rovnyagin V., "Voiskovoi Starshina Militsii Shabdana Dzhantaeva (Nekrolog)", *Semirechenskie Oblastnye Vedomosti*, no.96, 1912.
(66) Abramzon, "Manapstvo i Religiya", p.93.
(67) 坂本勉『イスラーム巡礼』岩波書店、二〇〇〇年、六六―七三頁。
(68) TsGA RK, f.44, op.1, d.8815, l.10.
(69) ʿUthmānʿAlī, *Taʾrïkh-i Qïrghïz-i Shādmānïya*, p.62, Ṣābir ʿAbd al-Mannuf, "Tïyānshān Tāwīning Tïran Chūqurlarindan", no.4, p.127.
(70) TsGA RK, f.44, op.1, d.10253, l. 42ob.
(71) TsGA RK, f.44, op.1, d.12702, l. 5.
(72) TsGA RK, f.44, op.1, d.12702, l. 5.
(73) Kamal, "Atabïz Shabdan Baatïr", pp.23-24.
(74) ʿUthmānʿAlī, *Taʾrïkh-i Qïrghïz-i Shādmānïya*, p.56.
(75) 宇山二〇世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観」五頁。なお、請願全文は、*Alash Qozghalïsï: Qūjattar men Materialdar Jïnaghï*, Almatï, 2004, pp.33-39を参照。
(76) TsGA RK, f.44, op.1, d.8815, l.5.
(77) TsGA RK, f.44, op.1, d.8815, l.5ob., 6ob.
(78) 一九〇六年八月にニジニ・ノヴゴロドで開催された第三回ロシア・ムスリム大会においても、トルキスタンとセミレチエにムスリム聖職者協議会を開設する決議がなされていた（小松「聖職者から自治構想へ」八一頁）。
(79) イスラーム化を推し量るうえでの重要な指標のひとつとして、シャリーアの普及を挙げることができよう。前述の大臣委員会議長宛ての請願書において、シャブダンは、「ムスリムであるクルグズとカザフはクルアーンとシャリーアに身をゆだね、その誓いを揺るぎないものと見なしている」と指摘している（TsGA RK, f.44, op.1, d.8815, 16.）。それからさかのぼること約一〇年前の一八九三年に執筆されたピシュペク郡長タルィジンの報告には、「男系七世代以内の結婚は慣習にしたがい不可能である。[…] しかし最近では、キルギズは男系の血縁関係に厳しい制限がないシャリーアにしたがいつつある。たとえば […] シャブダン・

ジャンタエーフは自分の娘を弟の息子に嫁がせた」とあり、すくなくとも自分の親族関係においてシャブダンがシャリーアに依拠していたことが窺われる（TsGA RK, f.64, op.1, d.5089, l.226ob.）。とはいえ、シャブダンがはたしてどの程度までシャリーアを理解・吸収し、二章で登場した「紙もペンもない官房」での裁きにおいてどのように運用していたのかということについては、史料を見いだせていないため、現時点では不明である。

（80）トルキスタンにおけるロシア語・現地語学校事業の展開については、帯谷知可「オストロウーモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』七六号、二〇〇五年、二一―二二頁を参照。

（81）TsGA RK, f.44, op.1, d.695, l. 5ob.

（82）TsGA RK, f.44, op.1, d.8815, l.6ob.

（83）小松『革命の中央アジア』五七―五九頁。

（84）'Uthmān'Ali, *Ta 'rikh-i Qirghiz-i Shādmāniya*, p.47-48.

（85）Abramzon, "Manapstvo i Religiya", p.92.

（86）TsGA RK, f.44, op.1, d.22356, l. 1-3ob.

（87）小松久男「『トルキスタンにおけるイスラム』――総督ドゥホフスキー大将のニコライ二世宛上奏文」『東海大学紀要』五〇号、一九八八年、三〇―六〇頁。

（88）TsGA RK, f.44, op.1, d.20752, l.98-98ob.

（89）TsGA RK, f.44, op.1, d.10253, l.28ob.

（90）移民政策に関しては、西山『ロシア革命と東方辺境地域』八三―一〇三頁を参照。また、移民政策と並行して実施された遊牧民の定住化政策については、秋山徹「混成村落の成立にみる二〇世紀初頭のクルグズ―ロシア関係」『日本中央アジア学会報』八号、二〇一二年、二一―四二頁を参照。

（91）秋山「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開」五三―五四頁。

（92）RGIA, f.391, op.3, d.925, l.19.

（93）長縄宣博「協力者か攪乱者か？ロシア帝国のタタール人」（第一一一回史学会大会公開シンポジウム「帝国とその周辺」報告資料）、二〇一三年一一月。

（94）この経緯に関しては、秋山徹「二〇世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察――シャブダン・ジャンタイの葬送儀式の分析をてがかりとして」『内陸アジア史研究』二四号、二〇〇九年、九七―九八頁を参照。

（95）*Vosstanie 1916 goda v Srednei Azii i Kazakhstane*, p.381.